

令和2年9月30日

## 「老年人文学」の構築への挑戦 —日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究—

### ◆発表のポイント

- ・超高齢・人口減少を迎えた日本において、老年期の生き方や死をめぐる状況が著しく変化しており、新たな「老い」「死」の捉え方や価値について検討することが急務です。
- ・「子どもや家族に迷惑をかけたくない」（〈迷惑〉意識）と「人の助けを借りず、できるだけ自分のことは自分でしたい」（「自律」「自立」に関わる意識）の関係や構造に注目し、現代と過去、日本と異なる文化圏を比較しながら、「老い」や「死」の捉え方や価値を検討しています。
- ・新たな「老い」「死」の捉え方や価値を創出するために、人文学が基幹となり様々な分野と連携する分野横断的な研究を推進する「老年人文学」という学問分野の構築を目指しています。

超高齢・人口減少を迎えた日本において、老いから死に至るまでをどのように生きるのかという問いについて、これまでとは異なる答えを導き出すことが求められています。このためには、制度やシステムを刷新するだけでなく、私たちが「老い」や「死」とどう向き合うのか、その捉え方や価値を検討し、考えることが必要不可欠です。現代日本において、「老い」や「死」について考える際に、多くの人が「子どもや家族に迷惑をかけたくない」という意識（〈迷惑〉意識）を抱いています。本プロジェクトでは、この〈迷惑〉意識とはいったい何なのか、私たちは、なぜ〈迷惑〉意識を抱くのかという問いについて、「自立」「自律」という意識との関連を視野に入れつつ、多くの人が抱く〈迷惑〉の正体を突きとめることを目的としています。

このプロジェクトには、研究代表者・研究分担者が計10人（うち本学から4人）、研究協力者が計12人（うち本学から4人）、総勢22人が参加しています。異なる分野の協働、成果の統合により、〈迷惑〉意識とその意識に隠された「自立・自律」の意識との関係を軸に、〈迷惑〉意識の構造と特質を解明し、日本社会の「老い」や「死」の新たな捉え方やそれを支える価値観の創出を目指しています。

### ■発表内容

#### <導入>

超高齢・人口減少を迎えた日本において、老いから死に至るまでをどのように生きるのかという問いについて、これまでとは異なる答えを導き出すことが求められています。介護を担う家族がおらず自宅で最期まで過ごしたいと願いながらも自宅で過ごせないような場合、介護施設に入所した

## PRESS RELEASE

くとも空きがなく順番を待たなければならないような場合、医療的なケアを多く受けながらも自宅で療養しなければならないような場合—私たちがこれから老いて死を迎えるまでには、これまでの日本社会が経験したことのない問題に直面します。

上記の問題に対応するためには、制度やシステムを刷新するだけでなく、私たちが「老い」や「死」とどう向き合うのか、その捉え方や価値を検討し、考えることが必要不可欠です。現代日本において、「老い」や「死」について考える際に、多くの人が「子どもや家族に迷惑をかけたくない」という意識（〈迷惑〉意識）を抱いています。この〈迷惑〉意識とはいったい何なのか？私たちは、なぜ〈迷惑〉意識を抱くのか？多くの人が抱く〈迷惑〉の正体を突きとめることができれば、現代日本における「老い」「死」をめぐる問題の答えとなる道筋が見いだせるのではないかと。これが研究の出発点です。

### <背景>

〈迷惑〉意識について、これまでの研究では、社会学、哲学、医学、看護学などの分野で研究が進められてきました。そこでは、およそ以下のようなことが明らかになっています。

- ①前近代にはない近代社会が生み出した産物とし、近代以降の社会構造のなかで生まれた特有の意識であること（時間軸でみた特性）。
- ②日本的なもの、また日本文化の特質が刻印されていること（空間軸でみた特性）。
- ③「迷惑をかけたくない」という意識には「自立・自律した存在でありたいという願望」「自分の所属する集団から排除されたくないという意識」「相手への気遣い」などの隠れた「思い」や「意識」が存在すること（〈迷惑〉意識の重層性）。

従来の研究で明らかにされてきたことについては、再検討が必要です。①については日本の前近代にも類例があり、前近代と近代以降との間における〈迷惑〉意識の共通性と差異を検討する必要があります。②については、日本と異なる国や地域との詳細な比較検討が必要です。③については「迷惑」意識の裏に隠された多様な意識や思いの関連を検討し、〈迷惑〉の構造を明らかにすることが必要です。

### <研究内容、業績>

以上の検討をするために、本プロジェクトでは、〈迷惑〉意識の背後にある「自立・自律」意識との関係に注目し、①歴史的な考察を行う「歴史班」（日本思想史、日本史、日本文学）、②現代日本人の意識の考察を行う「現代日本研究班」（死生学、宗教学、科学史）、③比較文化的な考察を行う「フィールド調査班」（文化人類学、看護学）の3つの研究班にわかれて、研究を進めています。2020年4月に、JSPS 科研費・基盤研究A（「日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究—「迷惑」と「ジリツ」の観点から」、代表：本村昌文、JP20H00007）に採択され、また本学の「令和2年度岡山大学次世代研究育成グループ」事業（拠点形成グループ）にも採択されています。

現在、私は前近代の〈迷惑〉意識に関する用例、近代以降の〈迷惑〉意識に関する用例を収集し、分析しているところです。資料を収集している段階ですが、前近代では「迷惑」という語ではなく、他の語で類似する意識を表している例が多く、この傾向は明治時代に入っても継続しています。一

## PRESS RELEASE

方、「迷惑」という語は現代に近くなればなるほど使用例が多くなる傾向があります。〈迷惑〉意識が「迷惑」という語とは異なる語で語られていた時代から「迷惑」という語を集中的に使用する時代へという変化しているという見通しをもちつつ、今後、各時代の〈迷惑〉意識の構造の変化を探究していく予定です。また、「自律」「自立」という言葉と〈迷惑〉意識が結合するのはいつか、またなぜ結合するのかという点についても歴史的な変遷を追いかけていく予定です。

このプロジェクトには、研究代表者・研究分担者が計10人（うち本学から4人）、研究協力者が計12人（うち本学から4人）、総勢22人が参加しています。異なる分野の協働、成果の統合により、〈迷惑〉意識とその意識に隠された「自立・自律」の意識との関係を軸に、〈迷惑〉意識の構造と特質を解明し、日本社会の「老い」や「死」の新たな捉え方やそれを支える価値観の創出を目指しています。

### <展望>

今後、このプロジェクトが進むことによって、多くの人を抱く〈迷惑〉意識の正体が明らかになり、医療・介護現場におけるケアの質の向上、老年期を生きる人々の生き方を支える「老い」や「死」の捉え方や価値の創出が期待されます。さらに、本プロジェクトを梃子として、老いから死に至るまでに生じる諸問題について、医療や介護の現場に根ざしつつ、人文学が基幹となり他分野と協働して研究を進める「老年人文学」という新たな学問分野の創出を目指しています。

### <略歴>

1970年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程修了。博士（文学）。専門は日本思想史。東北大学大学院文学研究科助手、東北大学百年史編纂室教育研究支援者、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授、同教授を経て現職。

### <お問い合わせ>

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科  
教授 本村 昌文  
(電話番号) 086-251-7395  
(メール) tomtom@okayama-u.ac.jp



岡山大学は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。